【エッセイ部門・優秀賞】

左様でござんしたか

私立学習院女子高等科 第２学年　続　遥夏

近頃、何もかもが気に喰わない。

オリンピックの開会式も、古臭くて凝り固まった思考しか持ち得ない政治家たちも、表現の自由を謳う SNS 信者たちも、そんな腐ったものを見た後にこびりついた不快感をすぐには拭えないのも。多感な時期だから、そういうお年頃だからなどと言ってもらっちゃあ困る。私が不愉快な思いをしているのだから。

このエッセイを書くことになった事の発端は、とある SNS に掲載された急上昇一位の記事への世間の反応がどうにも気になったからである。その記事によると、「某アニメ主題歌の歌姫の夫、妻が仕事で不在の間、不倫相手を自宅に連れ込（以下略）…」とのこと。その夫婦は私も知るところの人物であった。妻の方は、ごく最近に日本で爆発的にヒットしたので、このスキャンダルの不意打ち攻撃は世間にクリティカルヒットしたのだろう。この夫へ向けられた誹謗中傷や妻への同情コメントなどの数多くの中から、私がいっとうわだかまりを感じたのは「見損なった。反省して欲しい。」というものだった。これに対して私は（はて、この人は一体何をどの立場からものを言っているのだ）とモヤっとしたのだ。彼らの「プライベート」に対して部外者が何を言っているのだと。此度の「プライベート」ないざこざ（とても大きな痴話喧嘩）において本来この「反省してほしい」という言葉は当事者或いは彼らに近しい人間が発するに相応しいものであるはず。ゆえに、一介のファンがこのような発言をするのは全くもって場違いだと、そう考えられるが…。

一旦この話題を SNS というパブリック内のプライベート空間に持ち込まれてしまうと、そう簡単に「これはモラルに反するのでは？」などとは言えないのだ。なぜならば、SNS 社会は今、公と私の南北朝時代だからである。現時点では全ての発言は個人のものと考えられ、もし発言先が不快だと訴えても、発言者は表現の自由だかひょうたんの珍優だかなんだかと言ってまともに取り合おうとしないのだ。他人のプライベートを自分のプライベートで発言しているだけと思っているこういった短絡的な思考の方々の増加により、SNS による悪質な事件が後を絶えないのだと考えられる。1 人の不快なコメントに対して、周りが注意するという一見善のような行為さえも、SNS では負の循環の発端にしかなり得ないのだ。かのコメントに対して無駄な思考を働かせてしまったが故に、片足の小指の薄皮をうっかり擦り入れてしまった私は、なぜこんな他人様のためにもならない意見を読むためにこの私の貴重な時間をくれてやらにゃならんのだと考えむすくれていると、あることに気がついた。このとんでもゴシップ自体には一度も不快だとは思わなかったのである。その理由は明白で、なぜならこの記事は認知している人物のものとはいえ、全くの赤の他人のものであって、人様の不幸は人様のものだと当たり前のように割り切っているからであった。そうして考

えた。この記事を他人の話だ、関係ないと割り切れるのならば、他人様のどうしようもないコメントも、私にゃ関係ないやいと割り切れるのではないかと。「匿名で自分の意見を呟けるよ！」が謳い文句の SNS ユーザーに対して不快感を覚えてしまう私こそがナンセンスなのだと。

結果、私が他人様の意見に左右されないようにと編み出したのが

「左様でござんしたか」精神

である。この自己流精神は、特に自ずから関することをせず、私は私、他人は他人といういわゆる「線引き」を忘れないというもので、これこそが真偽飛び交うネット社会で生き抜く上での素晴らしい公私の境の保ち方ではないかと考えた。「左様でござんしたか」というフレーズは良くも悪くも何とも言えない絶妙な距離感とニュアンスを持ち合わせているように感じる。使う時々のシチュエーションによって、肯定的にも否定的にも取ることができ、且つ解釈も人それぞれという臨機応変さも兼ね備えているのだ。これにはポテンシャルしかない。

飛んで未来の話である。情報戦がそこかしこで繰り広げられる時代、自分の社会的地位を維持し続けるためにも SNS 断ちの選択は取り難い。然しあんな他人様の意見という毬栗を玄関先いっぱいにばら撒かれて行手を阻まれるのは足が不自由な年寄りには些か不快である。如何にして踏まず、外界へ出られようかと思いやるが、そうこうしているうちにも時間はゆうに過ぎていく。縁側でくつろぐババ友のもう何度目かもわからないような話に片耳を貸しながら、どうしたものかとそこらにふと目をやると視界に入る竹箒…

そうか、彼れで掃いちまおうか。と

ちゃんと聞けと喚くババ友への急上昇一位ワード「左様でござんしたか」の呟きも忘れずに。